

「死別における意味」の意味

——意味再構成理論の観点と今後の展望——

Meanings of "Meaning in Bereavement": Perspectives and Prospects of Meaning Reconstruction Theory

川島大輔 中京大学心理学部

KAWASHIMA Daisuke School of Psychology, Chukyo University

キーワード：意味、意味再構成、死別

Key words: meaning, meaning reconstruction, bereavement

はじめに

人生を通じて私たちは様々な苦難に直面する。仏教用語に愛別離苦という言葉があるように、大切な人との別れは大きな苦痛をもたらし、中でも死別はその最たるものであろう。他方で、辛く苦しい経験を経ることがむしろその後の人間的成長をもたらすことも指摘されている (e.g., Tedeschi, Park, & Calhoun, 1998)。しかし精神的健康の悪化も成長も、人間が生きていく上で経験するプロセスの側面であり、どちらかだけで論じることに限界があるのは言うまでもない。むしろ大切なのは、死別者がその喪失をどのように意味づけながら、一変した世界の中でその後の人生を生きていくのかに着目することだろう。

こうした意味の重要視は、1990年代ごろから生じた死別研究におけるパラダイム転換と密接に関わっている。古典的なグリーフの理論では死別後の段階的なプロセスや、故人との絆を切ることの重要性などが指摘されていたが、そうした理論には十分な根拠がなく、むしろ研究や臨床実践において様々な弊害をもたらすことが指摘されるようになってきた (e.g., Hagman, 2001; Neimeyer, 2006/2002)。そしてそうした古典的なモデルへの批判的検討を経て、苦痛に打ちひしがれる受動的な存在ではなく能動的な行為主体として、あるいは悲嘆反応 (grief reaction) ではなく悲しむ営み (grieving) として (Attig, 1998/1996)、死別経験を

捉える視点へと、死別研究のパラダイムがシフトしていった。そこではトラウマ理論、アタッチメント理論、ストレス理論など様々な理論的枠組みにおける発展があったが、その中核に位置づくのは「死別における意味」、すなわち死別者がその喪失をどのように意味づけているのかに着目する必要性の認識であった (e.g., Davis, Wortman, Lehman, & Silver, 2000; Neimeyer, 2001a; Thompson & Janigian, 1988)。とりわけ、「意味」(meaning) をその理論の中心に置く意味再構成理論 (Meaning Reconstruction Theory) は多くの関心を集め、現在に至るまでに数多くの研究知見と実践を蓄積してきている。

意味再構成理論における「意味」

意味再構成理論は、構成主義者 (constructivist) の立場から、グリーフの中心的なプロセスは「意味の再構成」(meaning reconstruction) であるという命題をかかげ、グリーフに関わる様々な理論や知見を再構成した理論である (Neimeyer, 2001a; Gillies & Neimeyer, 2006; Neimeyer & Anderson, 2002)。とくに、死別において「なぜ (私が/あの人が/私たちが)?」という問いに対する答えを、遺された人がどのように探し求め、いかに見出すのかについて検討する際の理論的枠組みである。メンフィス大学のロバート・A・ニーマイヤー (Robert A. Neimeyer) によって提唱され、その後多くの

研究、実践の蓄積を得てきている¹⁾。

それではこの意味再構成理論において「意味」はどのように定義づけられているのだろうか。意味をめぐる諸研究と同じく（浦田・山本・金馬, 2018）、意味再構成理論に関する諸研究で扱われる「意味」も複層的であるが、大きくは二つの側面、すなわち意味探求を経て構成された意味（meaning made）と、プロセスとしての意味（meaning making）に区別されるだろう。前者は、既知のもので、すでに見出した、構成（constructs）である。他方で、後者は探し求め、見出し、あるいは邂逅し、生成するプロセス（process）である（Gillies, Neimeyer, & Milman, 2014）。以下で具体的に見ていこう。

1. 構成としての意味

意味再構成理論では、人間は自己や世界を理解するための構成、つまり意味構造（meaning structures）ないし意味システム（meaning system）²⁾を保持しており、私たちはそれに頼って行動を起こしたり、将来を予測したり、人生の様々な出来事を解釈する存在として位置づけられる。構成としての意味は、パーソナル・コンストラクト（personal constructs: Kelly, 1955）、想定世界（assumptive worlds: Janoff-Bulman, 1992）、ライフスキーマ（Thompson & Janigian, 1988）といった概念と同種のものとされる。

またその内容については、「日々の活動や優先順位」「自己知覚」「対人関係」「未来に対する見方」「世界に対する見方」「信仰やスピリチュアリティ」の6つの主要な領域が想定されていた（Gillies & Neimeyer, 2006）。ただしその後の研究ではこの領域が必ずしもそのまま扱われてきたわけではない。実際その後、構成としての意味を測定しうる尺度として、Integration of Stressful Life Experiences Scale（ISLES: Holland, Currier, Coleman, & Neimeyer, 2010）や Grief and Meaning Reconstruction Inventory（GMRI: Gillies, Neimeyer, & Milman, 2015）が開発されており、そこで測定される意味システムの領域は上記のものとは異なっている。前者は「理解可能性」（comprehensibility）と「世界に地歩を占める感覚」（footing in the world）という二つの下

位尺度から構成されており、ストレスフルな経験を既存の意味システムにどの程度統合できるのかを測定するものである。後者は、ISLESを補完するものとして開発された尺度であり、より広範な意味システムの領域をカバーしている。喪失の意味についての自由記述を内容分析して見出したカテゴリーに基づき項目を構成し（Gillies et al., 2014）、最終的に、「継続する絆」（continuing bonds）や「空虚感・無意味さ」（emptiness, meaningfulness）など5つの下位尺度を見出している。また内容分析の結果見出した30のカテゴリーを用いた、喪失に対する意味の主題を分析するためのコードブックも提案されている（Gillies et al., 2014）。このように構成としての意味の具体的な内容は、使用尺度や研究アプローチによっても異なると言える。

2. プロセスとしての意味

プロセスとしての意味の核となる意味再構成プロセスとは、意味を探求し（search for meaning）何らかの意味を了解する（sense making）プロセスであり、そこで重視されているのが、意味了解、有益性発見、アイデンティティの変化の3つの活動（activities）である（Neimeyer & Anderson, 2002; Gillies & Neimeyer, 2006）。まず意味了解（sense making）は、喪失の原因を理解することで、死別によって揺らいだ意味システムの秩序や一貫性を修復しようとする活動である。これは理解可能なものとしての意味（meaning as comprehensibility: Davis, Nolen-Hoeksema, & Larson, 1998）とも言い換えられ、具体的には「タバコを毎日のように吸っていたから、肺ガンで死んだ」と亡くなった理由を故人の行動パターンの結果として理解することや、「神様があまりにもこの子が可愛かったので、天国に連れて行った」と何らかの宗教的信念の中で喪失の意味を了解することである（川島, 2008）。

次に、有益性発見（benefit finding）である。これは、辛い経験にもかかわらず、そこにポジティブな含み（positive implication）あるいは明るい面（silver lining）を見出そうとする活動であり、意義としての意味（meaning as significance: Davis et al., 1998）と言い換えられる。具体的には、死別の経験を通じて「家族の絆が強

まった」と感じたり、今後の人生について何らかの「見通しを得られた」と思うなど、経験から新たな価値や意義を見出す活動である(川島, 2008)。

最後に、アイデンティティの変化(identity change)である。これは自己や社会的世界の潜在的な価値や生きる目的を再発見すること、あるいは一変した世界での新しい役割を試みることである。そして変化の結果として、トラウマ後の成長(post traumatic growth: Tedeschi et al., 1998)が見られることもある。

意味再構成理論ではこれら3つの活動の中でも、意味理解を喪失後の適応に対するもっとも重要な活動として位置づけてきたし、実証研究を通じてその根拠も提示されてきた(Holland, Currier, & Neimeyer, 2006)。なお有益性発見はポジティブな価値を含んでいるが、意味理解とアイデンティティの変化は必ずしもポジティブなものとは限らない。とくに暴力的な死別を経験した場合などはネガティブな内容が多く含まれる(川島, 2008)。

3. 構成とプロセスの関係性

ここで疑問として生じるのは、構成としての意味とプロセスとしての意味の関係である。意味再構成理論における両者の関係性は次のようなモデルで捉えられている。すなわち、構成としての意味である意味システムは常に安定しているわけではない。危機に直面することでそれが揺らいだり、崩壊する。とくに死別は意味の危機(crisis of meaning)とされ(Neimeyer & Anderson, 2002)、それまでの意味システムに同化することが困難で苦痛が増加した場合には、意味が探し求められ、生成される。そこでは前述の3つの活動が主に活性化し、喪失前の意味システムに作用することで新しい意味システムに再構成される。すなわち調整である。ただし、この意味再構成プロセスを経てもなお、苦痛が和らがない場合には、再び意味が探し求められる(Gillies & Neimeyer, 2006)。このように構成としての意味とプロセスとしての意味は相互に関連している。

ただし実際の研究でこれらの意味のどこに焦点が当てられていたかについて考えてみると、研究アプロー

チによって異なっていることも確かである(川島, 2008)。事例報告が中心ではあるが、質的アプローチを通じた検討ではプロセスに迫ろうとしていると言える(e.g., Neimeyer, 2001b; Neimeyer, Keesee, & Fortner, 2000; Neimeyer & Stewart, 1996)。他方で数量的な研究ではプロセスというよりは、その達成程度が測定されてきたため、意味探求の結果として構成された意味、つまり意味システムの一部に着目しているとも言える。なお前述のISLES(Holland et al., 2010)は意味理解の達成程度を測定する尺度として位置づけられる。他方で、コードブック(Gillies et al., 2014)およびGMRI(Gillies et al., 2015)は、3つの活動に関する自由記述内容が元になっており、これらの活動の結果に迫るためのコーディング法と尺度である。

ところで死別を経験した際に、私たちは常に意味を再構成するわけではない。先に見たモデルで言えば、死別経験を喪失前の意味システムに同化できる場合、苦痛はそれほど感じない。そのため意味が探し求められることもないのである。こうしたプロセスは明示的な再構成プロセスとは異なり、周囲からすれば(重大な喪失にもかかわらず)以前と変化なく適応的にその後の人生を生きているように見える。こうした人々は、二重プロセスモデル(dual-process model: Stroebe & Schut, 1999)³⁾で言うところの、回復志向的なプロセスに従事していると言える(Neimeyer, 2000)。加えてボナーノは、グリーフプロセスには複数のパターンがあるとした上で、意味を探求しないにもかかわらず良好な適応を示す一群をして、レジリエンスを発揮する人々の存在を指摘している(Bonanno, Wortman, & Nesse, 2004)。この点について、以前は十分な理論的整理がなされていなかったが(川島, 2008)、現在では同化のプロセスを辿っていると理解されている(Coleman & Neimeyer, 2010; Neimeyer, 2015)。

こうした近年の研究や実践報告を踏まえて、当初は「悲しむ営みにおける中心的なプロセスは、喪失に対する意味の再構成である」(Neimeyer, 2001a)と述べられていたものが、近年では「(喪失に見舞われた意味システムの)再確認あるいは再構成(reaffirm or reconstruct)」(e.g., Neimeyer, 2016)と記述されているなど、意味を求めないプロセスをも取り込んだ理論に再

構成されている。

認知モデルからナラティブモデルへのシフト,あるいは統合

研究が蓄積されるにつれて意味再構成プロセスを3つの活動として説明することの限界性も徐々に浮き彫りとなってきた。その中には、測定上の問題や概念整理の問題など様々なものがあるが (e.g., 川島, 2008; Neimeyer, 2016; Park, 2010), ここでまず着目したいのは意味の認知的側面を強調することの限界性である。意味再構成プロセスは認知理論に基づく知見 (e.g., Janoff-Bulman, 1992; Thompson & Janigian, 1988) から大きく影響を受けてきた (Gillies & Neimeyer, 2006)。しかし認知的側面が強調される反面、情動や行為、さらには故人や社会との関係性といった側面が軽視されがちであった (Gillies & Neimeyer, 2006; 川島, 2008; Neimeyer, 2016)。こうした批判への応答や、臨床実践、研究知見の蓄積を経て、意味再構成理論の焦点も認知的側面から自己物語 (self-narrative: Neimeyer, 2006) へとシフトしていったのである。

ただし、より正確に記述すれば、ナラティブの重要性については以前から指摘されてきたことも事実である (e.g., Neimeyer, 2001b; Neimeyer et al., 2000; Neimeyer & Stewart, 1996)。しかし臨床事例の個性記述的な報告にとどまっておき、また既述の認知モデルとの統合もなされていなかった (川島, 2008)。ナラティブという観点を理論の全体を説明する概念として取り入れることは、意味の認知的側面から、包括的な意味の全体へとその射程を拡張したのである。

こうした自己物語を中核に据えた意味再構成理論、すなわちナラティブモデルへのシフトに大きな影響を及ぼしたと考えられるものの一つが「三部モデル (tripartite model)」 (Sands, 2009) であろう。このモデルでは、故人、自分自身、そして (社会的なネットワークの中で関わりを持つ) 他者とのそれぞれの関係性において、その関係性を理解し、再構成し、そして再配置するまでのグリーフプロセスを辿ることを想定する (Sands, Jordan, & Neimeyer, 2011)。これにより、死別と

いう出来事の語り (event story) のみならず故人との関係性についてのバックストーリー (back story) の両方に光を当てることが可能になったといえる (Neimeyer & Thompson, 2014)。川島 (2008) は以前、意味再構成理論における課題の一つに、死の意味理解が盛んに検討される一方で、故人の人生そのものの意味 (making sense of the life) を了解しようとする試みが欠けていると指摘したが、故人がどう生き、遺されたものとのように関わりを持っていたのかを意味づけることの重要性が、現在では広く認識されているといえよう。

さて、ここまで意味再構成理論の発展を概観してきたが、死別における「意味」を改めて吟味してみると、ナラティブモデルへの統合を経た今、その意味するところは前述の定義からさらに拡張しているといえよう。第一に、意味システムを自己物語として捉えることで、認知のみならず、情動や行為にわたる包括的な構造を含むようになった (Neimeyer, 2016)。第二に、死別という出来事に対する意味のみならず、故人との関係性に対する意味構成も包含するようになった。第三に、臨床実践では以前より指摘されていた3つの次元 (e.g., Neimeyer, 2000; 2006), すなわちパーソナル、対人関係、社会という次元での意味再構成プロセスに、研究においても迫ることが可能になったと言えよう。

意味再構成理論のさらなる再構成に向けて

上記の通り、意味再構成理論自体が新しい知見や実践を踏まえた再構成を経験してきた。これはその前提にある構成主義的な観点と最終的には臨床実践 (とくにグリーフセラピー) に資するという目的のもと、様々な理論や研究、実践アプローチを取り入れ再構成することの重要性が、ニューマイヤーおよび共同研究者たちに広く認識されていたからに他ならない。もとより意味再構成理論は、臨床実践に向けたアドホックな理論なのである。

さらに近年では、社会構成主義 (Neimeyer, Klass, & Dennis, 2014) に基づく検討や、ヴィジュアルなものやパフォーマンスなどとの関連 (Neimeyer & Thompson,

2014)についても検討が進められている。その中で、グリーフに関連した物語のジャンルや社会文化的文脈との関わり、そして意味再構成プロセスにおける非言語的側面を扱うことの重要性なども指摘されつつある。これらの観点はセラピーの文脈では以前より指摘されてはいたが (Neimeyer, 2000), 現状では、前述のモデルに十分統合されているとは言い難い。こうした今後の発展に向けた議論を促進するために、以下においていくつかの観点を提示したい。

1. 意味探求と了解のあいだ

意味の再構成プロセスは前述の通り、意味を探求する行為から何らかの意味を理解するまでを含むものである。この2つのあいだにおいて、遺された人がどのようなプロセスを経験しているのかについては、これまでも質的、個性記述的な検討を通じて報告されてきた (e.g., Neimeyer, 2001b; Neimeyer et al., 2000; Neimeyer & Stewart, 1996)。しかし意味を理解できずに逡巡するプロセスが描かれることは少ない。そればかりか、苦痛を経て困難と向き合い、新たな意味を見出すという典型的な物語のプロット⁴⁾の枠に収まるように構成された意味をもつばら報告してきたとはいえないだろうか。

確かに、意味探求という行為がその後の不適応を招く危険性 (Bonanno, Papa, Lalande, Zhang, & Noll, 2005; Park, 2010) を軽視するべきではない。苦痛の程度が深刻になるのは、意味を探し求めたがそれを見出すことができなかつた人であることも (Davis et al., 2000; Neimeyer, 2000), とくに臨床実践においては十分に注意を払う必要がある。他方で、こうした探求と了解の関係性については研究上もいまだ明快な見解が得られてはいないことからすれば (Coleman & Neimeyer, 2010), 意味の探求と了解の「あいだ」(木村, 1982) についてのより丁寧な研究の蓄積が求められている。加えて、これまで介入の根拠とさえされてきた、意味が散漫なまま統合されない語りが不適応を招くという前提自体についても改めて吟味することが必要だろう。実際、ボナーノらは米国で認められたような意味探求と不適応の関係性が中国では認められなかつたこ

とを報告している (Bonanno et al., 2005)。また国内の研究では、逡巡し、一つの筋に織り上げられることもなく、たゆたう語りの積極的な意義も報告されてきた (e.g., 川野, 2008; Kawashima & Kawano, 2017)。こうした安定しない、ゆらぎを含んだ意味再構成のプロセスについて、文化差も加味しながら検討することが今後さらに必要だろう。

2. 能動と受動のあいだ

意味を探求し、創造し、発見するという能動性は、死別研究のパラダイム転換の核であったし、その重要性は言うまでもない。他方で、それが過剰に求められているとは言えないだろうか。探求と了解のあいだを遺された人の能動性でのみ捉えることには限界もあるのではないだろうか。

川島と川野は、息子を自死で失った中年女性の語りを分析し、原因を探し出そうとする行為と、自らの責任であると意味づける行為をそれぞれ描いている (Kawashima & Kawano, 2017)。

あの、犯人探しをした時期があったんですよ。例えば、いじめで死んだり、借金でと言うのはある程度犯人探しますよね。(略) 一生懸命メールを読んだり、日記を読んだりしながら、原因を探してたりした時期があったりしたんですけど。でも結局ね、これ(手記)書いてて、あっと思ったんですけど、犯人は、私です。っていうことなんです。(略) 犯人は、母親の私です。きっと命をつないでやれなかったのは私です。死にたいというメールをもらいながら、結局はあの子を生に導いてやれなかったのは産んだ私の責任です。こうやって、ずうずうしく生きている私です。私は一生私を許せない、許さない。苦しんで苦しんで、あちら側から合図が来るまで生きていくしかない。

意味を探し求めるとしても、それは本来、身近な他者の死に対する、生き残ったものとしての「責任-応答可能性」(responsabilité)⁵⁾として立ち上がるものだろう。他者の死に対する責任を担うこと。それは逃げることでできない負いを受動的に引き受けることでし

か果たし得ない。他者の死に立ち向かいながら、「我ここに」と応答することが、自分だけが生き残ったという罪障性と苦痛を抱えながらもなお、一変した世界で生き続けることを可能にするのである。意味再構成理論の課題として残されていた、喪失の苦痛を呼び起こすものにそれでも向き合い続けていく行為を説明する原理（川島，2008）は、こうした観点から光を当てることではじめて明らかになるのではないだろうか。

3. 非－意味

これまでの意味再構成理論でも、私たちが世界を意味づける方法の大部分は暗黙の（implicit）うちにあることを指摘しているが（Neimeyer, 2015）、関心の中心にあるのは、意味が再構成される明示的な（explicit）プロセスとその結果である。また暗黙理のプロセスも「まだ」求められていない（時が経てば求められ、了解されうる）プロセスとして位置づけられているようにも思われる。関連して、意味を探し求めない一群を少数派（minority）と位置づけ意味生成に従事する人々に目を向ける（Neimeyer, 2000）のか、それとも、激しい悲嘆や苦痛に苛まれた人々が意味を探求することは認めつつも、意味を求めないことはごく当たり前のことであるとするのか（Bonanno et al., 2004）の違いは大きい。この立場の違いは、意味再構成理論がグリーンセラピーという実践領域をとくに意識して構成されてきたことと関連しているが、臨床実践の中で、意味を探求し了解するプロセスだけに注目することは困難だろう。実際、生活の立て直しに資する社会的・経済的な支援は欠かせない（瀬藤，2017）。

さらにより重要なことは生涯にわたるそのプロセスに目を向けることである。そうすることで見えてくるのは、容易には意味として立ち現れないものである。それは言葉で表されたり、何らかの形で語られることなく、地下深くに埋葬されたものである。不可能な喪の場所としてのクリプト（crypte）⁶⁾は、まさに非－意味の場所である。

以下は、村上春樹の短編小説「タイランド」（『神の子どもたちはみな踊る』（村上，2002，p.144）に収蔵。な

お引用に当たって一部の文章を省略した）で登場人物が発した言葉である。この登場人物は、別の人物が過去の重大な喪失を語るのを制止し、以下のように語りかける。

いったん言葉にしてしまうと、それは嘘になります。今は我慢することが必要です。言葉をお捨てなさい。言葉は石になります。

ナラティブシフトを経てもなお、意味再構成理論では言語的であれ、非言語的であれ、語られることが前提とされてきた。しかしホロコーストを生き延びたものの語り（Frank, 2002/1995）や、トラウマティックな死別を経験したものの語り（川野，2008）は、逆説的だが、語りえないものがあることを物語る。こうした非－意味は、「語りに穿たれた穴」（Kawashima & Kawano, 2017）や「秘密」（川野，2010）としてのみ現前するだろう。

しかし不可能な喪を抱えながら、その後の世界をたった一人で生き抜くのはあまりにも過酷である。語りえないものを抱えながら、それでもなお何かを伝えようとする存在として、その人を受け入れ、応答しようとする誰かがそばにいること。そのことが辛く苦しい世界を生き延びるための1つの灯火となるのであり、そうした他者との関わりの中で立ち現れてくる、死別における意味もまたあるだろう。それは意味（了解）と非－意味のあいだを、ともにたゆたうことが、遺された人の人生にもたらす〈意味〉である。

本稿では、意味再構成理論に着目し、「死別における意味」についてこれまでの理論的發展を含めて概観した。その中で、構成としての意味とプロセスとしての意味という2つの側面があること、また認知モデルからナラティブモデルへの統合に伴い、死別における意味が拡張していったことも見てきた。そして今後のさらなる展開で期待される「意味」の射程について、とくに探求と了解、能動と受動、そして非－意味という観点を提示し、それぞれのあいだに迫ることの重要性を指摘した。これらの点については、臨床実践の現場で蓄積されてきた知見とも照らし合わせた丁寧

な検討がさらに必要である。今後、死別における意味をめぐる議論の活性化に、この試論がいくらかの貢献ができれば望外の喜びである。

注

- 1) ニーマイアー教授のウェブサイト (<https://www.robertneimeyphd.com>) にはこれまでの研究実績に加えて、現在進行中のプロジェクトが複数記載されている。
- 2) 近年では、意味構造よりも意味システムという表現が用いられている (e.g., Neimeyer, 2016) ため、以降では統一して意味システムと表現する。
- 3) 死別経験を振り返り、故人を悼む「喪失志向」(loss-oriented) と、新しい生活や役割に従事する「回復志向」(restoration-oriented) の間を、行ったり来たりする中で適応していくと考えるモデル。
- 4) これはゲーゲンがコメディ・ロマンスの物語と名付けた語りの形式と言えるだろう (Gergen & Gergen, 1988)。
- 5) ここでは詳細には立ち入らないが、とくにデリダ (Derrida, 2004/1997) やレヴィナス (Levinas, 1994/1993) の論考がここでの議論に大きく影響している。
- 6) 「秘密の」「隠された」「暗号化された」などを意味する語であり、納骨や礼拝のための地下埋葬室などを意味する。クリプトの住人は常に「生きた死者」である (Derrida, 2006/1976)。

引用文献

アティグ, T. (1998) 死別の悲しみに向きあう (林大, 訳). 大月書店. (Attig, T. (1996) *How we grieve: Relearning the world*. New York: Oxford University Press.)

Bonanno, G. A., Wortman, C. B., & Nesse, R. M. (2004) Prospective patterns of resilience and maladjustment during widowhood. *Psychology and Aging, 19*, 260-271.

Bonanno, G. A., Papa, A., Lalande, K., Zhang, N., & Noll, J. G. (2005) Grief processing and deliberate grief avoidance: A prospective comparison of bereaved spouses and parents in the United States

and the People's Republic of China. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 73*, 86-98.

Coleman, R. A., & Neimeyer, R. A. (2010) Measuring meaning: Searching for and making sense of spousal loss in late-life. *Death Studies, 34*, 804-834.

Davis, C. G., Nolen-Hoeksema, S., & Larson, J. (1998) Making sense of loss and benefiting from experience: Two construals of meaning. *Journal of Personality and Social Psychology, 75*, 561-574.

Davis, C., Wortman, C. B., Lehman, D. R., & Silver, R. C. (2000) Searching for meaning in loss: Are clinical assumptions correct? *Death Studies, 24*, 497-540.

デリダ, J. (2004) アデュール——エマニュエル・レヴィナスへ (藤本一勇, 訳). 岩波書店. (Derrida, J. (1997) *Adieu à Emmanuel Lévinas*. Paris: Galilée.)

デリダ, J. (2006) Fors——[数々の裁き／を除いて] ニコラ・アブラハムとマリア・トロークの角のある言葉. N. アブラハム・M. トローク, 狼男の言語標本——埋葬語法 of 精神分析 / 付・デリダ序文《Fors》(港道隆・前田悠希・森茂起・宮川貴美子, 訳)(pp.173-241). 法政大学出版局. (Derrida, J. (1976) Fors: Les mots angls de Nicolas Abraham et Maria Torok. In N. Abraham & M. Torok, *Cryptonomie: Le verbiere de l'homme aux loups* (pp.7-73). Paris: Éditions Aubier Flammarion.)

フランク, A. W. (2002) 傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理 (鈴木智之, 訳). ゆみる出版. (Frank, A. W. (1995) *The wounded storyteller: Body, illness, and ethics*. Chicago: University of Chicago Press.)

Gergen, K. J., & Gergen, M. M. (1988) Narrative and the self as relationship. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology, Vol.21* (pp. 17-56). Cambridge: Academic Press.

Gillies, J., & Neimeyer, R. A. (2006) Loss, grief, and the search for significance: Toward a model of meaning reconstruction in bereavement. *Journal of Constructivist Psychology, 19*, 31-65.

Gillies, J., Neimeyer, R. A., & Milman, E. (2014) The meaning of loss codebook: Construction of a system for analyzing meanings made in bereavement. *Death Studies, 38*, 207-216.

Gillies, J. M., Neimeyer, R. A., & Milman, E. (2015) The Grief and Meaning Reconstruction Inventory (GMRI): Initial validation of a new measure. *Death Studies, 39*, 61-74.

Hagman, G. (2001) Beyond deathtaxis: Toward a new psychoanalytic understanding and treatment of mourning. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Meaning reconstruction and the experience of loss* (pp. 13-31). Washington, DC: American Psychological Association.

Holland, J. M., Currier, J. M., & Neimeyer, R. A. (2006) Meaning reconstruction in the first two years of bereavement: The role of sense-making and benefit-finding. *Omega: Journal of Death and Dying, 53*(3), 175-191.

Holland, J. M., Currier, J. M., Coleman, R. A., & Neimeyer, R. A.

- (2010) The Integration of Stressful Life Experiences Scale (ISLES): Development and initial validation of a new measure. *International Journal of Stress Management*, 17, 325-352.
- Janoff-Bulman, R. (1992) *Shattered assumptions: Towards a new psychology of trauma*. New York: Free Press.
- 川野健治 (2008) 自死遺族の語り——今、返事を書くということ。やまだようこ (編), 質的心理学講座第2巻 人生と病の語り (pp.79-99). 東京大学出版会。
- 川野健治 (2010) 秘密、もしくは立ち上がる主体のために。質的心理学フォーラム, No.2, 5-10.
- 川島大輔 (2008) 意味再構成理論の現状と課題——死別による悲嘆における意味の探求。心理学評論, 51, 485-499.
- Kawashima, D., & Kawano, K. (2017) Meaning reconstruction process after suicide: Life-story of a Japanese woman who lost her son to suicide. *Omega: Journal of Death and Dying*, 75, 360-375.
- Kelly, G. A. (1955) *A theory of personality: The psychology of personal constructs I*. New York: W. W. Norton.
- 木村敏 (1982) 時間と自己。中央公論社 (中公新書)。
- レヴィナス, E. (1994) 神・死・時間 (合田正人, 訳)。法政大学出版局。(Lévinas, E. (1993) *Dieu, la mort et le temps*. Paris: Grasset.)
- 村上春樹 (2002) 神の子どもたちはみな踊る。新潮社 (新潮文庫)。
- Neimeyer, R. A. (2000) Searching for the meaning of meaning: Grief therapy and the process of reconstruction. *Death Studies*, 24, 541-558.
- Neimeyer, R. A. (Ed.) (2001a) *Meaning reconstruction and the experience of loss*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Neimeyer, R. A. (2001b) Reauthoring life narratives: Grief therapy as meaning reconstruction. *Israel Journal of Psychiatry and Related Sciences*, 38, 171-183.
- ニーメヤー, R. A. (2006) 〈大切なもの〉を失ったあなたに——喪失をのりこえるガイド (鈴木剛子, 訳) 春秋社。(Neimeyer, R. A. (2002) *Lessons of loss: A guide of coping*. New York: McGraw-Hill.)
- Neimeyer, R. A. (2006) Re-storying loss: Fostering growth in the posttraumatic narrative. In L. G. Calhoun & R. G. Tedeschi (Eds.), *Handbook of posttraumatic growth: Research & practice* (pp. 68-80). Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Neimeyer, R. A. (2015) Meaning in bereavement. In R. E. Anderson (Ed.), *World suffering and the quality of life* (pp. 115-124). New York: Springer.
- Neimeyer, R. A. (2016) Meaning reconstruction in the wake of loss: Evolution of a research program. *Behaviour Change*, 33, 65-79.
- Neimeyer, R., & Stewart, A. (1996) Trauma, healing, and the narrative employment of loss. *Families in Society: The Journal of Contemporary Social Services*, 77, 360-375.
- Neimeyer, R. A., Keese, N. J., & Fortner, B. V. (2000) Loss and meaning reconstruction: Propositions and procedures. In R. Malkinson, S. S. Rubin, & E. Witztum (Eds.), *Traumatic and non-traumatic loss and bereavement: Clinical theory and practice* (pp. 197-230). Madison: Psychosocial press.
- Neimeyer, R. A., & Anderson, A. (2002) Meaning reconstruction theory. In N. Thompson (Ed.), *Loss and grief: A guide for human services practitioners* (pp. 45-64). Basingstoke: Palgrave.
- Neimeyer, R. A., Klass, D., & Dennis, M. R. (2014) A social constructionist account of grief: loss and the narration of meaning. *Death Studies*, 38, 485-498.
- Neimeyer, R., & Thompson, B. (2014) Meaning making and the art of grief therapy. In B.E. Thompson & R.A. Neimeyer (Eds.), *Grief and the expressive arts: Practices for creating meaning* (pp. 3-13). New York: Routledge.
- Park, C. L. (2010) Making sense of the meaning literature: An integrative review of meaning making and its effects on adjustment to stressful life events. *Psychological Bulletin*, 136, 257-301.
- Sands, D. (2009) A tripartite model of suicide grief: Meaning-making and the relationship with the deceased. *Grief Matters: The Australian Journal of Grief and Bereavement*, 12, 10-17.
- Sands, D., Jordan, J. E., & Neimeyer, R. A. (2011) The meanings of suicide: A narrative approach to healing. In J. R. Jordan, & J. L. McIntosh (Eds.), *Grief after suicide: Understanding the consequences and caring for the survivors* (pp.249-282). New York: Routledge.
- 瀬藤乃理子 (2017) 死別。川島大輔・近藤恵 (編) (2016) はじめての死生心理学——現代社会において、死とともに生きる (pp.47-60). 新曜社。
- Stroebe, M. S., & Schut, H. (1999) The dual process model of coping with bereavement: Rationale and description. *Death Studies*, 23, 197-224.
- Tedeschi, R. G., Park, C. L., & Calhoun, L. G. (Eds.) (1998) *Posttraumatic growth: Positive changes in the aftermath of crisis*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.
- Thompson, S. C., & Janigan, A. S. (1988) Life schemes: A framework for understanding the search for meaning. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 7, 260-280.
- 浦田悠・山本美智代・金馬国晴 (2018) 質的心理学と意味、質的心理学の意味。質的心理学フォーラム, No.10, 5-15.